

小学校における国語辞典を活用した授業研究

－「慣用句」の実践を通して－

坂井明洋 (M19EP015)

1. 問題の所在

語彙とは、物事を理解したり、表現したりする上で不可欠なものである。そのため、語彙指導は、国語科の授業においても継続的に行われている。しかし、こうした指導は多くの時間を必要とすることから、自宅学習や作業的な学習によることが多くなる。また、意味の分からない言葉を、ただ国語辞典を使って調べる作業的な学習では、真の語彙・語句の理解にはつながらないだろう。

PISA 調査結果（国立教育政策研究所）によれば、読解力に関して「日本においては、2015 年調査の得点は 2012 年調査の得点よりも 22 点低く、統計的な有意差がある。」と公表された。つまり、数年前に比べて、子どもたちの読解力が低下しているという科学的な根拠が出されたのである。その原因として語彙力の低下が指摘されている。また、『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 国語編』では、「小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と質の違いがある」と示されており、これらは国語のみならず全教科の学習を支える力でもあることから、「語彙を豊かにする指導の改善と充実を図っていく」こととされているのである。

このように、語彙指導が重要視されている中で、意図的な指導のほとんど唯一の機会である学校教育における語彙指導が、ただ機械的に国語辞典で言葉を調べさせるものでいいのかという問題意識のもと研究を行った。

2. 学習指導要領と先行研究

新学習指導要領では育成すべき三つの柱として知識・技、思考力・判断力・表現力等、

学びに向かう力・人間性等が示されている。そして、この資質・能力を育成するために、「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められている。では「深い学び」とはどういうものを指すのだろうか。田村（2017）は、「深い学び」について、以下のように述べている。

「深い学び」とは、子どもたちが習得・活用・探求を視野に入れた各教科固有の学習過程の中で、それまでに身に付けていた資質・能力を存分に活用・発揮し、その結果、資質・能力が様々に関連付いたり、組み合わせさったりして構造化されていくことと考えることができる。

つまり、田村(2017)によると、これまでに身につけた知識や語彙を関連付けたり、組み合わせたりする学びが「深い学び」といえる。これを語彙指導に当てはめて考えてみると、「深い学び」は、ただ機械的に国語辞典で言葉を調べさせるものではなく、知識を結び付け、新たな知識や語彙を習得していくこと、またそのプロセスを充実させることであると考えられた。そこで、語彙の中でこれまでに身に付けたことを頼りに意味を考え、想像することのできる「慣用句」に着目した。慣用句は、文字通りの意味と異なる言葉の使われ方と、言葉をもとに意味を考えられるところに面白さがあるといえる。そのため、慣用句の単元の授業実践を通して、ただ機械的に知らない言葉を調べるのではなく、これまでに身に付けたことを関連付けて考え、新しい知識を習得していくプロセスを充実させた授業実践を研究しようと考えた。

では、現在、学校現場において慣用句はどのように指導されているのであろうか。その

ために、まず、『小学校学習指導要領（平成 29 年度告示）』の「国語」における記述から、慣用句が語彙指導の中にどのように位置づけられているのかを探った。

〔第 1 学年及び第 2 学年〕	2	内容
(1) オ 身近なことを表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には意味による語句のまとまりがあることに気付き、語彙を豊かにすること。		

〔第 3 学年及び第 4 学年〕	2	内容
(1) オ 様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにすること。		

〔第 5 学年及び第 6 学年〕	2	内容
(1) オ 思考に関わる語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにすること。また、語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うこと。		

この記述から、慣用句は「言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにする」第 3 学年及び第 4 学年に学ぶこととされていることがわかった。

また、『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 国語編』第 3 学年及び第 4 学年の慣用句に関する記述は以下の通りである。

「長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、日常生活でも使うようにすることに関する内容を示している。」

この記述から、慣用句は理解語彙に留めるのではなく、「日常でも使う」表現語彙として、学習させるべきであることがわかった。指導法に関しては、以下の通り記述されていた。

(1) <u>イ 辞書や辞典を利用して調べる活動を取り入れるなど、調べる習慣を付けること。</u> と関連させ、言葉の意味に加え、短文づくりをしたり、本や文章を読んでその中に使われているものを探したりすることなどを通して、 <u>自分の表現に用いるようにすることも必要である。</u>
--

つまり、慣用句を指導する際には「辞書や辞典を利用して調べる活動を取り入れ」「表現に用いるようにする」べきとされていることがわかった。国語辞典の利用に関しても、慣用句同様、第 3 学年及び第 4 学年に位置づけられていた。それまでに身に付けてきた知識・語彙をもとに新たな知識・語彙を習得するのみでは、正確に習得できるとはいえない。そのため、身に付けてきた知識・語彙をもとに新たな知識・語彙を獲得する過程の中で、国語辞典の活用は必要不可欠であり、国語辞典を利用する習慣づくりに関しても効果的であると考えられた。

3. 研究の目的と方法

語彙指導に関する先行研究や学習指導要領の記述を踏まえて、授業において、新しい知識を獲得していくプロセスが重要であり、その手段として「慣用句」の単元における授業実践が有効であると考えられた。そこで、これまでに身に付けたことを学習内容と関連付けて考え、新しい語彙を習得していくプロセスを充実させた授業実践の開発を研究の目的とした。その研究方法として小学校 4 年生の「慣用句」に関する授業実践を行い、成果と課題を見出した。

4. 授業実践

（1）時期及び対象児童

時期および対象は以下の通りである。

時期	令和元年11月
対象	山梨県内公立小学校（連携協力校） 4年生1クラス23名（男子15名、女子8名）

単元は「慣用句」（光村図書 4 下 はばたき P32～33）で、「(3) イ 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。」の目標のもと、学習時間二時間で授業実践を行った。

（2）授業実践の概要

①一時間目

導入：慣用句とはなにかを理解する
展開１：国語辞典を使って慣用句を調べる
展開２：慣用句を使った例文を作る
まとめ：本時の授業でわかったことを書く
②二時間目
導入：慣用句の分類をする
展開１：慣用句カードを作る
（展開２：カードを使ってクイズを行わせる）
まとめ：本単元の感想を書く

①一時間目の学習内容

導入は、慣用句の特別な意味を理解させることを目的として活動を行った。慣用句の魅力の一つとして、「文字通りの意味」と異なる言葉の使われ方に面白さがあり、また、慣用句は言葉に着目することで意味を予想できる面白さがあると考えられた。そのため、「文字通りの意味」と「慣用句としての意味」を比較し、慣用句がどういうものなのか理解させる活動を行った。具体的には、「火花を散らす」を取り上げ、昔から使われてきた意味に合った絵を選ばせた。その選択肢として「文字通りの意味」、「慣用句の意味」、「どちらでもない意味（ハイタッチしている様子）」を表す絵を提示した。また、「慣用句の意味」を視覚的に理解させるために、アニメで慣用句としての意味である「激しく争っている様子」を、火花を散らして表現しているものを提示した。

展開１は、国語辞典(『三省堂例解小学国語辞典 第五版』三省堂)を使って調べさせる活動を行った。その際、慣用句の一つひとつの言葉に着目させ、クイズのような感覚で意味を予想させた。国語辞典の使い方は三年生で既習しているが、改めて確認させるために、まず全員で同じ慣用句を調べさせた。具体的には、「心がおどる」を扱い、「心」「おどる」のイメージを膨らませてから調べさせた。また、ここで慣用句を調べる際には中心となる語を引けばよい(「心がおどる」の場合は「心」を国語辞典で引く)ことを伝えた。

展開２は、ワークシート(図１)を扱い、例文

を作らせる活動を行った。まず、用例の状況・場面を参考に、空欄に当てはまる慣用句を考えさせた。具体的には、「授業が始まるので、筆箱を出したらテレビのリモコンだったので、()ほど恥ずかしかった。」という状況を提示し、選択肢三つ(①頭をひねる、②顔から火が出る、③のどから手が出る)から当てはまりそうな慣用句を選ばせた。次に、慣用句を参考に、その慣用句に合った状況・場面を考えられるようにするため、空欄に当てはまる言葉を考えて入れ、文章を完成させるかたちで慣用句を用いた例文を作らせた。具体的には、「目を丸くする」のを扱い、「動物園に行くと()ので目を丸くした。」と提示し、空欄を埋めて、文章を完成させた。また、このとき「目を丸くする」が「目を丸くした」と変化するように、慣用句の形が変化する場合があることを確認させた。

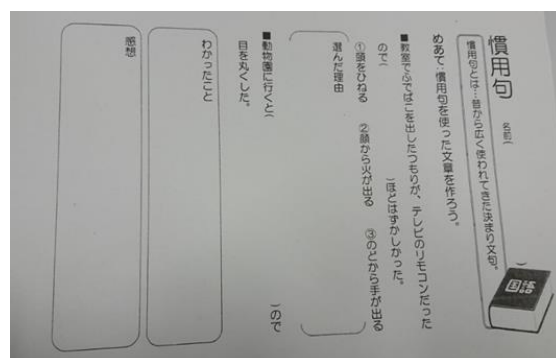


図１ ワークシート（一時間目）

②二時間目の学習内容

導入は、慣用句の分類をさせる活動を行った。目的は、慣用句には「体の一部」「動物」「植物」を含むものが多いことに気づかせ、慣用句を調べる際は、中心となる語を探せばいいことを意識付けるためである。具体的には、「頭をひねる」「目を丸くする」「馬が合う」「借りてきた猫」「うり二つ」「実を結ぶ」を取り上げ、ワークシート(図２)を扱い、三つのグループに分けさせた。これは、以降に行う慣用句カードづくりの際、どんな言葉を調べればよいのかを理解し、円滑に行うことも目的として行った。

展開1は、慣用句を場面とつなげることを目的とし、まず慣用句カードを作らせる活動を行った。慣用句カードは、表面に慣用句、慣用句を用いた短文を記し、裏面に慣用句の意味を記すものを指す。国語辞典の中から自分の使ってみたい慣用句を見つけさせ、慣用句カードを作らせた。その際、慣用句の調べ方として中心となる言葉を引くことや、例文を作る時間で学んだことを確認した。

展開2は、短文に着目させることを目的として、自分の作った慣用句カードを使って班ごとにクイズを行わせる予定であったが、実際に活動を行うことはできなかった。クイズの内容としては、慣用句カードの表面にある慣用句、慣用句を用いた短文をもとに、慣用句の意味を答えるというものを想定していた。また、授業後には、班の児童以外のクイズをいつでも解けるよう、授業終了後、慣用句カードをまとめて学級文庫への配置を行った。さらに、授業により慣用句に興味を持った児童が、様々な慣用句に出会えるよう慣用句の本も加えて学級文庫への配置を行った。

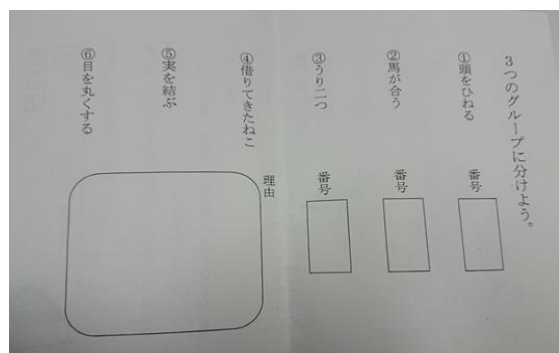


図2 ワークシート（二時間目）

（3）結果と考察

導入では、児童が「文字通りの意味」を8名、「慣用句としての意味」を13名、「どちらでもない意味」を2名の児童が選択した。「慣用句としての意味」を選択した児童から、「アニメとかで、にらみ合っていると火花が散るから」と経験をもとに意味を予想している姿がみられた。また、「文字通りの意味」を選択した児童からも「たしかに」「あるね」など

賛同する姿がみられた。

「心をおどる」を国語辞典で調べる場面では、国語辞典の引き方を三年生で既習していたため、児童のつまずきは特にみられず進めることができた。しかし、慣用句を調べるときは中心となる語を調べるということを伝えるとき、中心となる語（「心」）が先頭にくる「心がおどる」を扱ったために、十分に理解しているのかどうかみとることが困難であった。そのため、国語辞典で調べる際、繰り返し確認すること、また「借りてきた猫」のように中心となる語（「猫」）が先頭にこないものを扱う必要があると考えられた。

場面をもとに慣用句を考えて、例文を作る「授業が始まるので、筆箱を出したらテレビのリモコンだったので、（ ）ほど恥ずかしかった。」の問題では、21名が「②顔から火が出る」を選択し、2名が「③のどから手が出る」を選択した。「②顔から火が出る」を選択した理由としては「はずかしくなると顔が火みたいに赤くなるから」「はずかしいと火みたいに顔があつくなるから」が上がり、「③のどから手が出る」を選択した理由としては「はずかしくてヤバイと思って手がでた」が挙げられた。どちらも、慣用句の言葉から意味を予想していることが伺えた。

慣用句をもとに場面を考えて行う「動物園に行くと（ ）ので目を丸くした。」の文章づくりでは半数以上が二つ以上考えて記述しており、活動中も楽しそうに取り組む姿がみられた。児童の記述例としては「ナマケモノがすごくはやく動いていた」「どうぶつがいなかった」「ぜつめつした生き物がいた」などがあり、「目を丸くする」に合った場面・状況を考えることができていた。

二時間目の導入で行った慣用句の分類は、ヒントを出すことで、最終的に20名が正しく解答することができた。しかし、想定していた以上に、子どもは困難に感じている様子が伺えた。理由としては、「うり」が子どもにとって身近なものではなかったことや、意味を知らない慣用句が含まれていたために戸惑っ

てしまったことがあげられる。ヒントとして、注目する語に線を引くことによって解答することができたが、「何を基準にグループ分けをするのか」ポイントを示さないと子どもにはわかりにくいと考えられた。導入は授業に興味を持たせることが大切なため、もう少しわかりやすい課題にすべきであった。

慣用句カードづくりの場面では、想定以上に時間がかかってしまった。その理由として、国語辞典から慣用句を探すことが困難であったことが考えられた。二時間目の単元の最後に記述させた単位を通しての感想の中に、「慣用句を見つけることが難しかった」という記述（3名）がみられた。たしかに、日常生活の中で慣用句を国語辞典から探すことはないため、児童は難しいと感じたのだろう。

また、短文づくりの際、慣用句を誤用する児童（5名）がみられた。原因を探るため、児童の使用した国語辞典を用いて、それぞれ児童が選んだ慣用句を調べた。すると、表1の通り、誤用した慣用句には、すべて国語辞典に用例が掲載されていないことがわかった。

表1 児童の選んだ慣用句

児童の選んだ慣用句 (ことわざも含む)	用法の 正誤	用例の 有無
目を回す	正	無
目を引く	正	有
目をめすむ	正	有
目を白黒させる	正	無
顔をくもらせる	正	無
顔向けができない	正	無
手をかえしなをかえ	正	無
足が棒になる	正	有
舌が回る	誤	無
心に描く	正	有
猫の手もかりたい	正	有
ねこをかぶる	誤	無
馬が合う	正	有
きつねにつままれる	正	有
虫の知らせ	誤	無
虫の息	正	無

うり二つ	誤	無
苦は楽の種	正	無
気に食わない	正	有
火ぶたを切る	正	有
終わりを告げる	正	有
取るものも取りあえず	誤	無
非のうちどころがない	正	有

次の二例は、慣用句を誤用した児童の記述である。児童が慣用句を誤用してしまった原因を考察し、述べていく。

児童の記述例①「舌が回る」
今日はじゅ業さんかん。しんじさんはぜっ対に発表すると決めていた。ついに発表する時が来た！発表後、しんじさんは「 <u>舌が回ってよかった。</u> 」と思った。

「舌が回る」は「彼は実によく舌が回る」「よくあんなに舌が回る」「まだよく舌が回らない子ども」（『明鏡ことわざ成句使い方辞典（2007）』）のように人や性質を表すときに用いる。そのため、「発表する時」という一時的な場合に用いるのは適切ではない。しかし、『三省堂例解国語辞典 第五版』には、「【舌が回る】つかえずによくしゃべる。」という意味のみの記載のため、児童が記述した文章が誤っているか、国語辞典からは判断できない。

児童の記述例②「虫の知らせ」
ぼくはお母さんのやくそくをやぶってしまって、家に帰ったら、 <u>虫の知らせ</u> がなる気がする。

「虫の知らせ」は「虫の知らせがあったのか、彼は飛行機に乗り換えて難を逃れた」（『明鏡ことわざ成句使い方辞典（2007）』）のように、「がある」と文を続けたり、「虫の知らせがあったのか～」「虫の知らせで～」と文を続けたりするものである。しかし、「舌が回る」と同様に『三省堂例解国語辞典 第五版』には、「【虫の知らせ】なんとなく悪いことが起こりそうな予感がすること。」という意味のみの記載のため、児童がこのような文章をつくったと考えられる。どちらも、用例が掲載されていれば、用例に即して文章を考えることがで

きただろう。

慣用句カードを使ったクイズに関しては、行う時間がなかったために今回実践することができなかった。そのため、授業終了後、児童が作った慣用句カードをまとめて学級文庫に配置することで、他の児童が作成した慣用句カードから、クイズをいつでも解ける環境づくりを行った。また、授業により慣用句に興味を持った児童が、様々な慣用句に出会えるよう慣用句の本(『ちびまる子ちゃんの慣用句教室』(2017)集英社)も学級文庫に配置した。1か月後に利用状況を調べた結果、慣用句カードは23名中22名、慣用句の本は20名が手に取ったことがわかった。

5. 成果と課題

(1) 成果と課題

本研究は、語彙指導がただ国語辞典を使って機械的に言葉を調べさせるものでいいのかという問題意識から、児童がこれまでに身につけた知識や語彙を学習内容と関連付けたり、組み合わせることで、新たな知識や語彙を習得していくというプロセスを重視して行った。

一時間目の導入での、「慣用句の意味を考える活動」、展開での「場面と慣用句を相互に考えていく活動」を通して、意味を知らない慣用句も既知の言葉や場面をもとに予想することができた。また、一時間目で慣用句の意味を予想する過程を重視し、活動を行ったことで、二時間目の導入に行った慣用句の分類の際にも、意味を知らない慣用句を予想することができた。また、学級文庫に配置した慣用句カード、慣用句の本の使用率や授業の感想から、慣用句及び国語辞典に興味を持つ様子がみられたことも成果といえるだろう。

しかし、二時間目の展開で行った慣用句カードづくりでは、感想の中に「国語辞典の中から慣用句を見つけることが難しい」という記述(三名)がみられた点(課題①)と、短文作りの際、慣用句を誤用する児童がみられた点(課題②)が課題として挙げられた。また、日常的に未知の語彙を既知の語彙をもとに習

得する習慣づけまで至ったのか十分に見取ることができなかったのは課題といえる。

(2) 改善策

課題①を改善するためには、子どもに国語辞典から慣用句を見つけさせることよりも、教師が児童の興味をもちそうな慣用句を提示して、調べさせるべきであった。また、課題②を改善するためには、用例が国語辞典に掲載されている慣用句に限定するべきであった。

以上の二つの視点を踏まえた上で、改善案として、用例が掲載されている慣用句をリストにまとめて配付し、児童がその中から調べてみたいと思った慣用句を調べ、慣用句カードを作る活動が提案できる。子どもが数ある慣用句の中から調べてみたいと思う慣用句を選択することで、子どもが目的をもって活動に取り組むことができるようにする。そして、選択した慣用句の意味を予想することで、これまでの知識を関連付けたり、組み合わせたりする時間も設ける。さらに、国語辞典で意味及び用例を確認した上で、短文作りを行うことで、知識と場面(生活経験)をつなげることができると考えられる。さらに、語彙指導として効果的であるのか繰り返し検討していく必要がある。

6. 引用文献

- ・北原保雄編(2007)『明鏡ことわざ成句使い方辞典』大修館書店
- ・国立教育政策研究所(2016) OECD 生徒の学習到達度調査(PISA)の調査結果
https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2015/03_result.pdf
- ・田近洵一ほか編(2011)『三省堂例解小学国語辞典 第五版』三省堂
- ・田村学・黒上春夫(2017)『田村学・黒上春夫の深い学びで生かす思考ツール』小学館
- ・文部科学省 小学校学習指導要領(平成 29 年度告示)
- ・文部科学省 小学校学習指導要領(平成 29 年度告示)解説国語編